

被災地復興のボランティア・ツアーを手がける山形県最上町の旅行会社の社長が、かつて建設業を営んだ経験を生かし、被災者向けの「木造プレハブ」を開発、販売を始めた。木の温かみを感じる居場所を安価に提供したいという。

山形・最上 木造プレハブ開発

「びったりあわせて釘を打つ。鉄製プレハブに負けない正確さがないとダメだ」

トラベル東北社長の山口ステイブさん(55)の声が作業場に響く。11月末までの納入に向け、臨時従業員2人と連日、箱形の木造プレハブ「Universal Building Cube」(汎用建設用キューブ、UBC)づくりに取り組んでいる。

発注したのは、子どもの遊び場作りを担う宮城県石巻市のNPO法人「こども∞感ばにー」。一つ6・5畳の広さのUBCを5個つなげて空き地に置き、約32畳の部屋にする。子どもたちに自由に絵を描いてもらうため、外壁はクリーム色に。値段は約300万円。木の温かみを感じることででき、一般的な鉄骨プレハブよりも3割ほど安い、と山口さん。

2007年まで建設会社の社長をしていた山口さんは、被災者の生活再建を支援した



木造プレハブの納屋＝山口ステイブさん提供

ぬくもりの場 被災者に

いと、安価で頑丈な木造プレハブを開発。国内で加工された集材材を使うことなどでゆがみの少ないユニットを作ることに成功した。

これまでに企業などから約3千万円を集め、宮城県内に計67個のUBCを無償で贈ったが「まだ足りない」。特に、漁業を本格化しようとした漁師たちが、共同作業場ではない個人用の納屋を必要としているという。木製のUBCはさびないので海風にも強い。宮城県女川町出島の漁師に20個を提供したが、寄付金不足で欲しい人すべてに行き渡らなかつた。

東日本大震災から4年半、

寄付金が集めにくくなったと感じる山口さんは、今後もUBCの提供を続けていけるように、ビジネスにすることに。今年3月に石巻市内に無人の展示場を設け、今回の初受注につなげた。

公共事業に頼る構造では見通しは暗いと判断し、07年に妻の実家の家業だった建設会社をたたんだ。約20人の社員に辞めてもらった。今回のUBC開発では、建設会社時代の道具や重機をフル活用。「社員に辞めてもらった罪悪感も持ち続けている。UBCを新事業にしたい。木工は比較的簡単に教えられる技術なので、田舎でも雇用を生みだせるはず」と意気込む。

UBCの無償支援も模索している。商品としての魅力を訴えるホームページを作り直し、漁師たちを前面に出して、インターネットでお金を募るクラウドファンディングも計画 중이다。(前川浩之)



木造プレハブを作る山口ステイブさん(中央)＝山形県最上町